

## 関係機関が連携して不登校生徒と家庭支援に取り組んだケース

### 1 気になる状況（SSW派遣のきっかけなど）

- 生徒Aは、コミュニケーションをとることが苦手であり、友人関係のトラブルから欠席が増えた。
- 生徒Aは、学業不振と家庭環境が不安定のため、2学期から不登校傾向となった。
- 学校は生徒Aに寄り添った学校生活を提案するも、長期休業以降、不登校となり対応に困っていた。

### 2 ケース会議後のアセスメント（見立て）とプランニング

SSWが主体となって次の基本情報などからプランニングが行われた。

#### (1) 基本情報など

- ・ 母親が身体障がい者であり、母親の身辺整理は父親がほぼ担っている。
- ・ 学級担任による家庭訪問の実施や、SCによる定期的なカウンセリングを実施していた。
- ・ 生徒Aは、不登校になった後、ゲームに没頭する日が増え、自宅に引きこもるなど外部との関わりが希薄となった。

#### (2) アセスメント及びプランニング

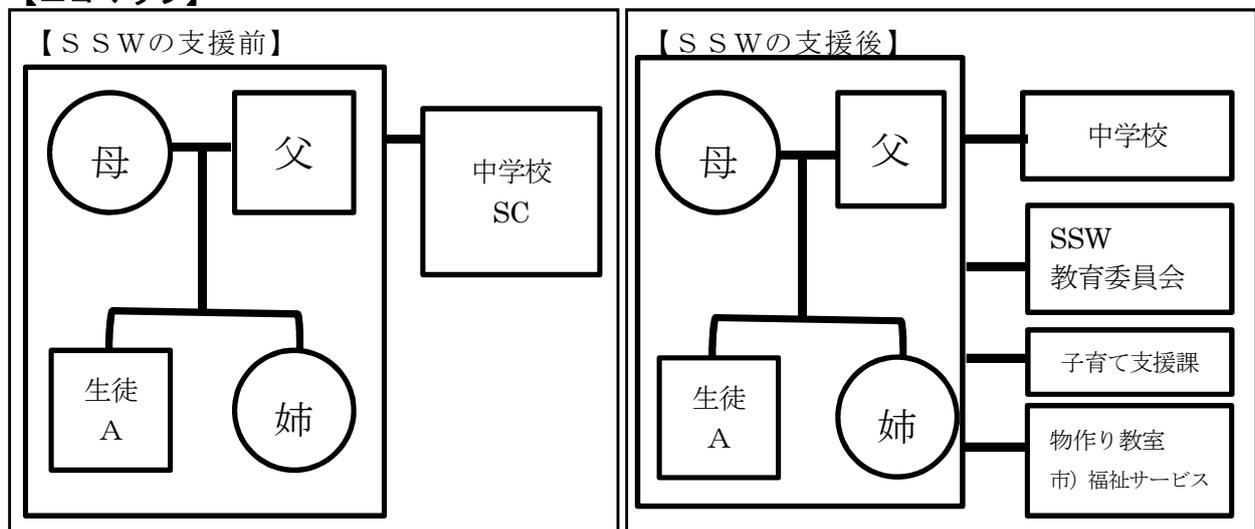
- ・ SSWの家庭訪問による家庭支援（生徒Aの生活把握、両親の困り感の傾聴、学校と家庭の関係構築の援助）
- ・ 関係機関（学校、市子育て支援課など）と連携した支援体制の構築
- ・ 市の福祉サービスや物づくり教室など、社会資源活用の促進

### 3 支援の状況（関係者や関係機関とその役割分担）

【学校】 家庭と信頼関係を構築し、生徒Aの登校意欲を高める寄り添った対応

【SSW】 市の福祉サービスや物づくり教室など、社会資源活用の促進

#### 【エコマップ】



### 4 支援後の状況（改善が見られたこと、成果など）

- 生徒A及び家庭が関係機関と繋がることで、学校以外の居場所づくりができ、家庭の希望に添った家庭環境への働きかけを行うことができた。
- 学校や家庭環境で今後どのような支援を必要とするのか、想定される対応の在り方について関係機関で適宜協議し、支援を行う体制を構築することができた。

## 学校、教育支援センターと連携し、支援体制を整えたケース

### 1 気になる状況（SSW派遣のきっかけなど）

- 当該生徒は、小学校高学年時の友人とのトラブルをきっかけに不安感が強まり、小学校第6学年後期より不登校となった。
- 小学校、母親、当該生徒、SSWと面談を重ねたが、不登校状態はなかなか改善されず、中学校に進学した後も登校することができなかった。

### 2 ケース会議後のアセスメント（見立て）とプランニング

SSWが主体となって実施されたケース会議において、次の基本情報などからプランニングが行われた。

#### (1) 基本情報

- 当該生徒の両親は離婚しており、当該生徒は母親と二人暮らしである。これまでの生育歴の中で発達の遅れ等を指摘されたことはない。
- 母親が就業しているため、当該生徒は日中一人で過ごすことが多く、買い物や散髪などの外出にも消極的になっている。
- 当該生徒は、学校には行けないが、学習はしたいという思いがある。

#### (2) アセスメント及びプランニング

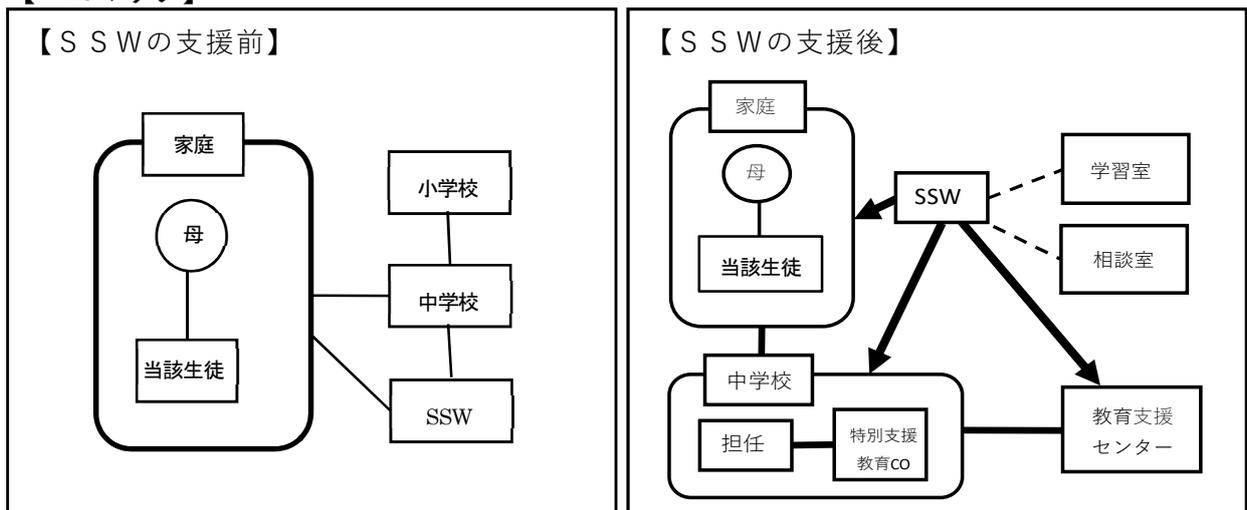
- SSWは、母親、当該生徒との面談を継続し、状況を把握しながら学校と連携していく。
- 教育支援センター、学習室、相談室などの社会資源との調整を行う。
- 学校は、当該生徒が安心して生活することができるよう、学校内で情報を共有し学習環境を整備する。

### 3 支援の状況（関係者や関係機関とその役割分担）

#### 【関係機関名】

- 学校：母親との連絡を継続し、定期的な面談及び家庭訪問による関係の構築  
当該生徒と相談し、ICT等を活用した学習支援の検討
- SSW：定期的な母子との面談の継続  
学校、教育支援センターなど家庭が関わる関係機関との調整
- 教育支援センター：人目が気になる当該生徒に対して衝立を用意するなどの柔軟な個別対応と受入れ体制の整備

#### 【エコマップ】



### 4 支援後の状況（改善が見られたこと、成果など）

- 数か月間、外出することができず限られた関わりの中で生活していたが、学級担任との面談、SSWとの面談を母子共に定期的に続け、当該生徒の回復を待つことができた。
- 事前に教育支援センターへの情報提供をすることにより、当該生徒の状態が安定した時期に教育支援センターとの連携を図ることができた。
- 不定期ではあるが、教育支援センターを利用することができており、学習への取組、他者との関わりを少しずつ増やしている。

関係機関と繋がり、支援体制を整えたケース

1 気になる状況（SSW派遣のきっかけなど）

- 自傷行為を発見した担任より面談依頼を受けた。
- 同時期に体調不良や漠然とした不安感を抱く等心身の不安定な状態が続き、欠席が増える。
- 欠席時には保護者と連絡が取りづらく、自傷行為が常習化している中での安否確認ができない状態が続いていた。

2 ケース会議後のアセスメント（見立て）とプランニング

中学校が主体となって実施されたケース会議において、次の基本情報などからプランニングが行われた。

(1) 基本情報など

- 父親が数年前に他界し、母子家庭となり、母親と兄、生徒Aの3人で暮らしている。
- 祖父母が近郊に在住しており、週末は祖父母宅で過ごしている。
- 生徒Aは心を開いた相手には信頼し話をしてくれるが、愛着傾向が強く依存的な関わりとなる。

(2) アセスメント及びプランニング

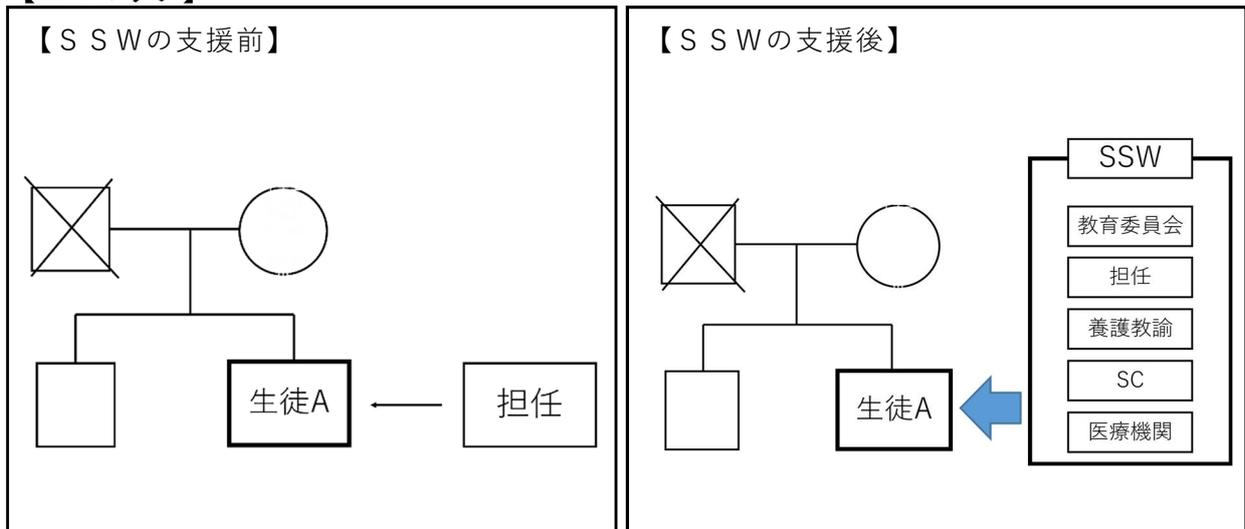
- 自傷行為が悪化し、精神的な不安定さが続いているため、関係機関と連携し生徒Aを見守り、医療的な支援を受けるため、適切な医療機関へ繋ぐ。
- 保護者は、自傷行為に気づいていながらも受け止めは軽く、命への危機感が薄いため、保護者との関係構築に努め、電話交流や面談を行い、状況の改善を図る。

3 支援の状況（関係者や関係機関とその役割分担）

【関係機関名】

- SSW 関係機関との連絡調整を行う。  
生徒Aの情緒的安定のため、いつでも相談に乗れる体制をつくり、継続的な面談を行い、保護者へも継続的な相談支援を行い、気持ちの吐き出しの場を作る。
- 学校 生徒Aに対する継続的な安全確認、見守り及び支援を行い、安心して登校出来るような環境づくりと登校時の様子を確認する。
- SC 医療機関への情報提供及び連携を進め、連絡調整を行う。

【エコマップ】



3 支援後の状況（改善が見られたこと、成果など）

- 生徒Aは、心身の安定のために医療機関へのつながりは欠かせないこと、また、自分の心身の状態を受け入れ、今後も上手く付き合う必要があることを自覚することができた。
- 医療機関への繋がりにより、保護者との連絡の機会が増え、保護者の思いを把握し、生徒Aの状況を詳細に把握できるようになった。

地域での見守りが必要なケース

1 気になる状況（SSW派遣のきっかけなど）

- 特別支援学級在籍で、自閉スペクトラム症特有の行動があり母親のストレスが高い。
- 本人の生活習慣等、年齢に応じた自立度に課題がある。
- 保護者の発信力が弱く、課題を把握しにくい。

2 ケース会議後のアセスメント（見立て）とプランニング

SSWが主体となって実施されたケース会議において、次の基本情報などからプランニングが行われた。

(1) 基本情報など

- 本人は養子であり、両親は障がいがあることを知らずに引きとっている。両親は基本的には本人をかわいがって育ててきたが、突拍子もない行動、独特な生活習慣などに、母親の苛々が強まっている。
- 学校としても、この先社会人になることを想定すると日常生活、社会生活のどちらにも支援が必要であると考えている。
- 父親も本人をとてかわいがっているが、将来にむけて心配をしている様子はない。特別支援学級に対しての理解は不明だが、特別支援学校への進学は強く拒否している。「障がい」に対する拒否反応が強い。
- 母親は地元出身ではなく、昔からの友人は近くにいない。同級生の母親とのつながりもほとんどない。外には一切相談していない。担任とのつながりは良好。

(2) アセスメント及びプランニング

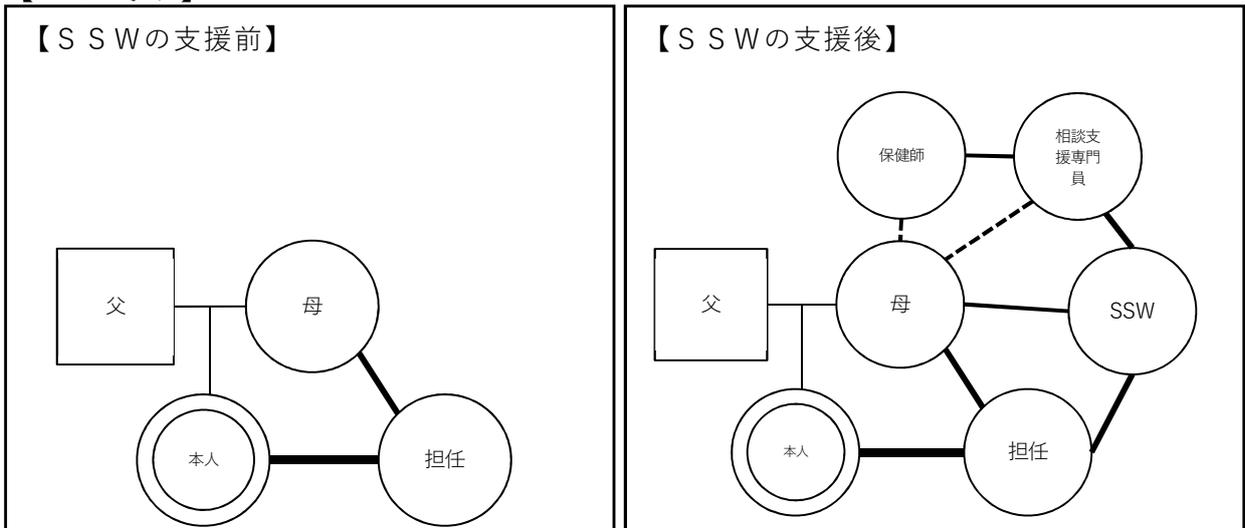
- 本人には支援が必要なことは明かだが、その認識は両親には薄い。母親は本人の心配より、自分が前のように本人をかわいがれないことにショックを受けている様子。
- 特別支援学校進学の可能性を探りながらも、保護者、本人が希望しない場合は、関係者が情報共有し、必要に応じて動く体制を整えていくことが必要。

3 支援の状況（関係者や関係機関とその役割分担）

【関係機関名】

- 福祉課（保健師）：長期的な状況把握
- 障害者相談支援事業所（相談支援専門員）：関係機関及び保護者への情報提供
- 教育委員会（SSW）：各機関の連絡調整、担任や母への情報提供
- 中学校（担任）：本人への情報提供

【エコマップ】



3 支援後の状況（改善が見られたこと、成果など）

- 関係者が実態を把握し、関係性は弱いながらも相談先があることを認識することができた。
- 現状では父親が拒んでいるが、必要に応じて福祉サービスが利用できることを確認できた。
- 本人は意欲的に生活を続けている。